

出雲市文化財保存活用地域計画

令和3年（2021）7月

島根県出雲市

目 次

序章	1
1. 計画作成の背景と目的	1
2. 計画の位置づけ	2
3. 計画期間	2
4. 計画の変更	2
第1章 出雲市の概要	3
1. 位置・面積及び交通	3
2. 自然的・地理的環境	4
3. 社会的状況	11
4. 歴史的背景	13
第2章 出雲市の歴史文化・文化財の概要及び特徴	25
1. 対象とする文化財	25
2. 出雲市の歴史文化の特徴	25
3. 指定文化財の概要と特徴	27
4. 未指定文化財の概要と特徴	29
第3章 文化財の把握調査	31
1. これまでの文化財調査の概要	31
2. 未調査事項	34
3. 今後の調査計画	35
第4章 文化財の保存・活用に関する課題・方針	36
1. 文化財の保存・活用に関する課題	36
2. 文化財の保存・活用に関する方針	40
3. 日本遺産・関連文化財群に関する事項	44
4. 歴史文化保存活用区域に関する事項	70
第5章 文化財の保存・活用に関する措置	90
1. 文化財の調査・指定等に関する取組	90
2. 文化財の修理・整備・修理技術等継承に関する取組	91
3. 防犯・防災対策・災害時対応に関する取組	93
4. 情報発信・普及啓発に関する取組	94
5. 人材育成に関する取組	96

6. 支援団体等民間連携に関する取組	97
7. 博物館に関する取組	98
8. 『出雲国風土記』編さん 1300 年に向けた取組	99
9. 日本遺産・関連文化財群に関する取組	100
10. 歴史文化保存活用区域に関する取組	105

第6章 文化財の保存・活用の推進体制110

1. 推進体制	110
2. 事務処理特例の適用を希望する事務の内容	111
3. 計画の進捗管理と自己評価の方法	111

序 章

1. 計画作成の背景と目的

『古事記』『日本書紀』には、出雲を舞台とする神話が数多く記され、全国で唯一ほぼ完本が伝わる『出雲国風土記』にも豊かな古代出雲の姿や、壮大な国引き神話が語られています。

出雲市には、その伝承地や登場地が今なお存在し、全国的に注目を集める荒神谷遺跡や西谷墳墓群などの史跡をはじめ、悠久の歴史を紡ぐ出雲大社や鰐淵寺などの寺社、神楽をはじめとする民俗芸能など有形・無形の歴史的、文化的な遺産が多数残されています。これらの文化財を保存・活用するため、出雲市では文化財の調査や研究、指定や登録、史跡の環境整備、出雲弥生の森博物館と荒神谷博物館の整備、学習機会の提供等の取組を進めてきました。

一方で、出雲市の文化財をとりまく状況は、少子高齢化や核家族化など、これまで文化財を支えてきた地域社会の変化により、文化財を次世代へ継承していくことが困難になりつつあります。このため、地域に存在する文化財を有形・無形、指定・未指定にかかわらず幅広く捉えて把握し、総合的に保存・活用するための指針となる「出雲市歴史文化基本構想」（以下、「基本構想」という。）を平成29年（2017）1月に策定し、出雲市の歴史文化の魅力発信や日本遺産の取組推進など、文化財や歴史文化の総合的な保存・活用を推進してきました。

文化財の保存・活用を巡る全国状況としては、過疎化・少子高齢化等の社会状況の変化を背景に、各地域の貴重な文化財の滅失・散逸等の防止が喫緊の課題となっています。このため、従来価値付けが明確でなかった未指定を含めた有形・無形の文化財をまちづくりに生かしつつ、文化財継承の担い手を確保し、地域社会総がかりで取り組んでいくことのできる体制づくりの必要性について国の方針が示されました。そして、平成30年（2018）には、文化財保護法が改正され、市町村が作成する文化財保存活用地域計画及び文化財の所有者等が作成する保存活用計画の文化庁長官による認定について制度化されたところです。

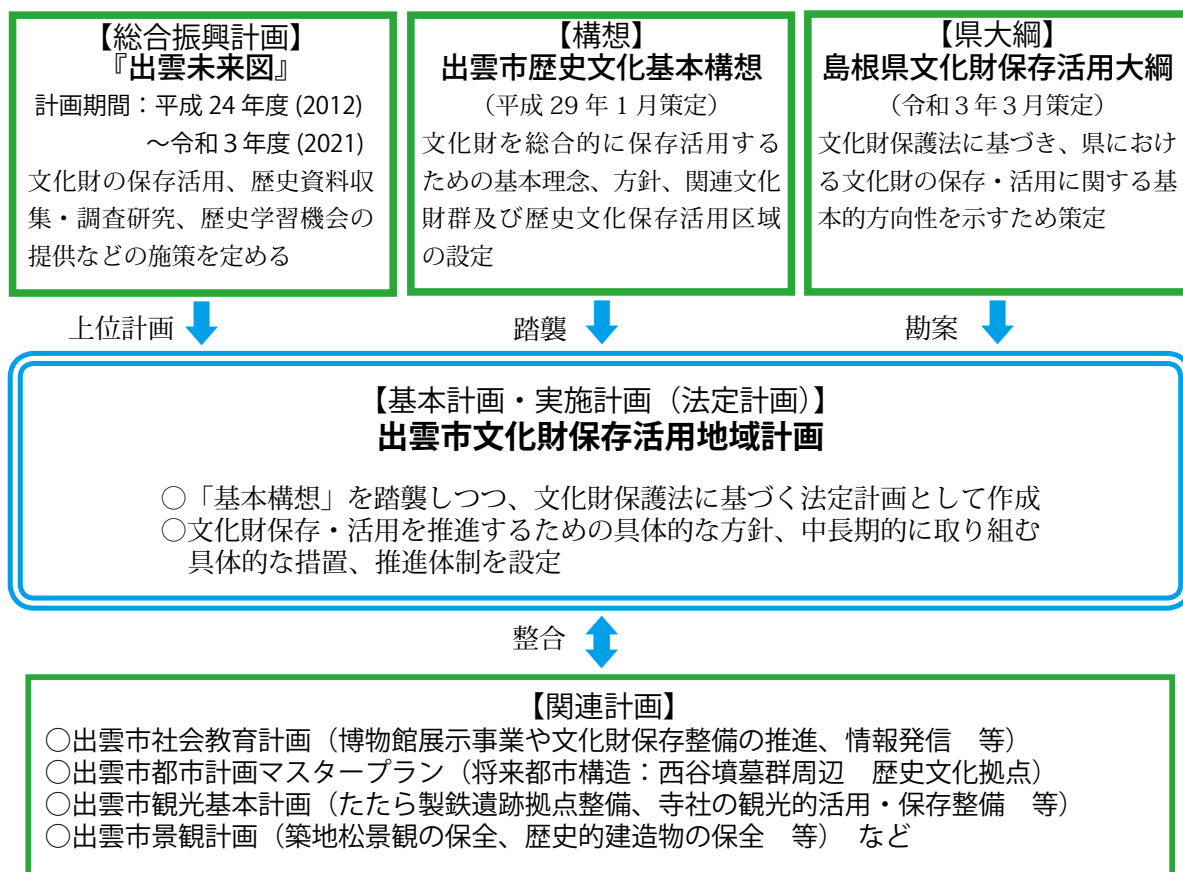
出雲市においても中長期的な観点での文化財の保存・活用のための取組を「基本構想」から一層進めていくことが求められます。このため、文化財保存・活用の目指す方向性や取組を定め、計画的かつ継続的に実施し、文化財の専門家や地域団体、地域住民が参画する地域社会総がかりによる文化財の次世代への継承を図るための計画として「出雲市文化財保存活用地域計画」（以下、「本計画」という。）を作成するものです。

本計画では、出雲市における文化財の保存・活用の基本理念を『神話と風土記の世界が今に息づく出雲』とし、総合的・持続的な文化財調査の推進と発信、諸課題に対する取組のほか、関連文化財群及び歴史文化保存活用区域の設定による一体的な文化財の保存・活用を図っていきます。そして、受け継がれてきた貴重な文化財について、市民をはじめ広く知っていただくとともに、地域で守り、生かし、未来へ伝える取組を推進していきます。

2. 計画の位置づけ

「本計画」は、「基本構想」を踏襲し、「島根県文化財保存活用大綱」を勘案しつつ、出雲市における文化財の保存・活用に関する目標や中長期的に取り組む具体的な内容を記載した基本計画（マスタープラン）かつ実施計画（アクションプラン）であり、文化財保護法の法定計画として位置づけるものです。

また、「出雲市総合振興計画」を上位計画とするほか、「出雲市社会教育計画」「出雲市都市計画マスタープラン」「出雲市観光基本計画」「出雲市景観計画」を関連計画とし整合を図りました。



3. 計画期間

出雲市の次期総合振興計画が令和3年度（2021）に策定予定であり、この総合振興計画への反映を見据え、計画期間を令和3年度（2021）から令和12年度（2030）までの10年間とします。

4. 計画の変更

認定を受けた本計画について、次に掲げる変更をする場合は、文化庁長官による変更の認定を受けて行うものとします。

- ・計画期間の変更
- ・市の区域内に存する文化財の保存に影響を与えるおそれのある変更
- ・地域計画の実施に支障が生じるおそれのある変更

なお、上記以外の軽微な変更を行った場合は、県を経由して文化庁へ情報提供します。

第1章 出雲市の概要

1. 位置・面積及び交通

出雲市は、島根県の東部、^{しんじこ}宍道湖の西側に位置し、北部は『出雲国風土記』の国引き神話で知られる島根半島、中央部は出雲平野、南部は中国山地で構成されています。市域は東西約30km、南北約39kmの範囲に広がり、東は松江市、西は大田市、南は雲南市・飯南町に接し、面積は624.36km²となっています。

道路は、出雲市の中央部を東西に横断する国道9号を軸に、出雲、大社、平田地域を結ぶ国道431号、南部の山間地域を結ぶ国道184号などが通り、それらが道路網の骨格となっています。また、国道9号と並行する山陰自動車道は、西は出雲ICまで開通し、宍道JCTからは松江自動車道が南方面に伸び、中国自動車道、尾道自動車道と接続しています。

広域的な公共交通機関も比較的整っています。宍道湖西岸にある出雲縁結び空港からは、東京(羽田)や大阪(伊丹)、静岡、仙台、名古屋(小牧)、神戸、福岡、隠岐への国内線が運行しています。鉄道はJR山陰本線が東西に伸び、宍道湖の北側には松江市と出雲市(出雲市駅、出雲大社前駅)をつなぐ^{いちばた}一畑電車が通っています。このほか主要都市へ直行する高速バス、JR出雲市駅を中心に市内各地を結ぶ路線バス、生活福祉バスも運行されています。

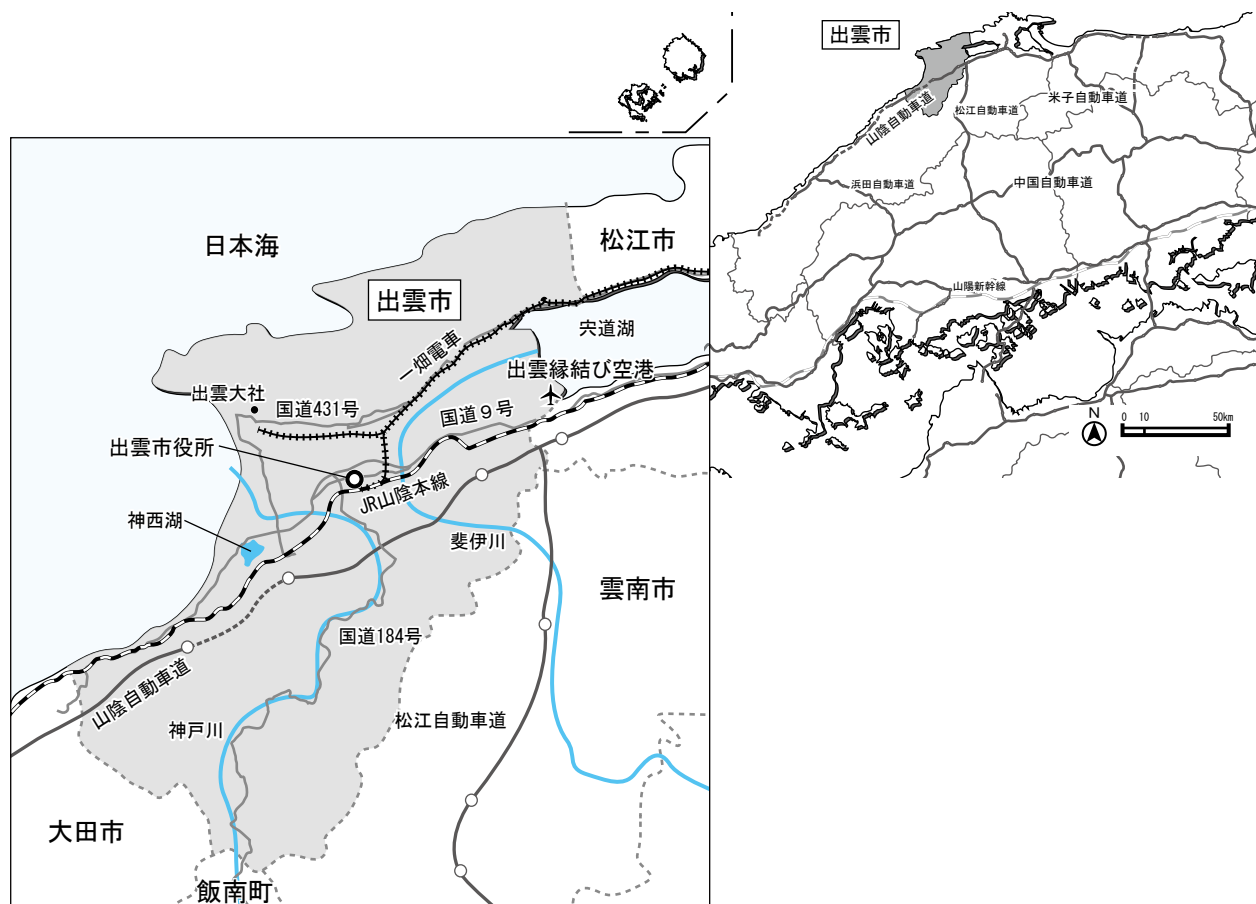


図1 出雲市の位置と主要交通網

2. 自然的・地理的環境

(1) 出雲平野の形成

出雲市の歴史は出雲平野の成り立ちと密接に関わっており、地形の形成については、古くは『出雲国風土記』の「国引き神話」でも語られています。現在の出雲市は、北の島根半島と南の中国山地の間に平野が広がり、中国山地から平野に流れ出でた斐伊川と神戸川がそれぞれ宍道湖と日本海に注ぎ込む地勢です。

三瓶山の噴火と沖積作用

出雲平野の形成が進むきっかけとなったのは、約 4000 年前（縄文時代後期）の三瓶山の噴火です。約 7000 年前（縄文時代早期）までは、古宍道湾が島根半島と中国山地を分断しており出雲平野は存在していませんでしたが、この噴火で供給された多量の土砂が神戸川によって運ばれ、次第にこの湾を埋めていきました。約 2000 年前（弥生時代）までには、今の出雲平野の原形が出来たと考えられていますが、平野の西側にはまだ大きな水域が広がっていました。奈良時代に「神門水海」と呼ばれたこの水域は、その後の沖積作用によって規模を縮小し、今では神西湖としてその名残をとどめています。

斐伊川東流による平野の拡大

いま一つ平野形成において注目される事象として、斐伊川の東流が挙げられます。かつては平野で東西に流れ、東は宍道湖、西は「神門水海」に注いでいた斐伊川は、中世末から近世初頭ごろ完全に東流するようになります。そして、江戸時代には上流で盛んに行われた「鉄穴流し」によって多量の砂が下流に運ばれるようになり、宍道湖西岸ではこの砂を利用した「川違え」により新田開発が進められました。^{※1}

地理的な特徴

このように、火山と人的開発の二つの要因によって急速に平野が拡大したことは、全国の海岸平野と比べても特異な例です。また、中国山地北縁、それに並行して延びる島根半島、そしてその間に広がる出雲平野、この三者が呈する地勢は国内ではかなり特殊です。

さらに、島根半島は日本海を隔てて朝鮮半島や大陸と対面し、沖では対馬海流とリマン海流が行き交う場所に位置しています。こうした地理的条件を背景に、出雲平野周辺には古代から近世に至るまで、各方面からさまざまな文化が流入しました。出雲市は、それらを受容し独自に展開させてきた地域といえます。

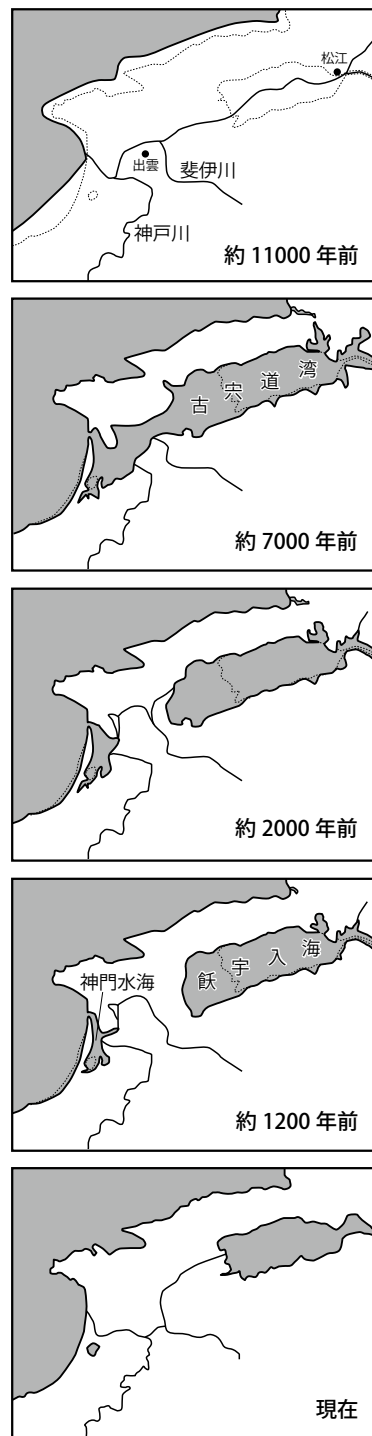


図2 出雲平野の形成過程

中村唯史「島根県東部の地形変遷」
『湖陵町誌』2000 を一部改変

※1 この他、出雲平野においては中世にも大規模な耕地開発が進められた。

(2) 地形・地質

出雲平野は、中国山地に源を発する斐伊川と神戸川により形成された沖積平野で、山陰地方では随一の規模を誇ります。日本海に面する島根半島の北及び西岸は、リアス式海岸が展開し、いくつかの入り江が形成されており、特徴的な地形と景観が見られます。このうち日御碕^{ひのみさき}を中心とした西岸域は大山隠岐国立公園に指定されています。

南の中国山地は比較的なだらかな山地で、雲南市等の境界付近では高いところで 500 ～ 600 m の稜線が形づくられています。その谷間に斐伊川、神戸川とその支流が流れ、下流の平野部へ注ぎます。斐伊川の下流部は全国でもまれな天井川としての地形と景観を呈し、神戸川中流部には国の名勝・天然記念物及び県立自然公園の立久恵峡^{たちくえきょう}があります。そして、出雲平野、島根半島、南の山間部を含む出雲市全域が、日本海を形成した地質時代の『大規模な地殻変動』がおこった地域『島根半島・宍道湖中海ジオパーク』として、日本ジオパークに認定されています。

このように出雲市は、海、山、平野、川、湖と多彩な地形を有しています。全体的に捉えると、北から島根半島の北山山系、平野と湖沼、中国山地が連なり、出雲平野は南北の山地に挟まれる形となっています。加えて、島根半島は、東西に長く、かつ、日本海に突き出した特徴的な地形であり、沖では対馬海流やリマン海流が行き交うことから、古来、大陸・朝鮮半島との交流を支える基盤（条件）でもありました。こうした地形の中には日本海形成期の特徴的な地質を見ることができ、小伊津町の砂泥互層^{さでい}（タービダイト層^{タービダイト層}*1）、日御碕^{ひのみさき}の流紋岩柱状節理（特に経島^{ふみしま}*2）などを挙げるができます。

また、『出雲国風土記』ゆかりの地として、出雲市域には島根半島（西部）や藺の長浜、かなびやま^{その}*3（大船山、仏経山）があり、周辺には佐比売山（三瓶山：大田市）や火神岳（大山：大山町ほか）、かなびやま（朝日山、茶臼山：松江市）があります。

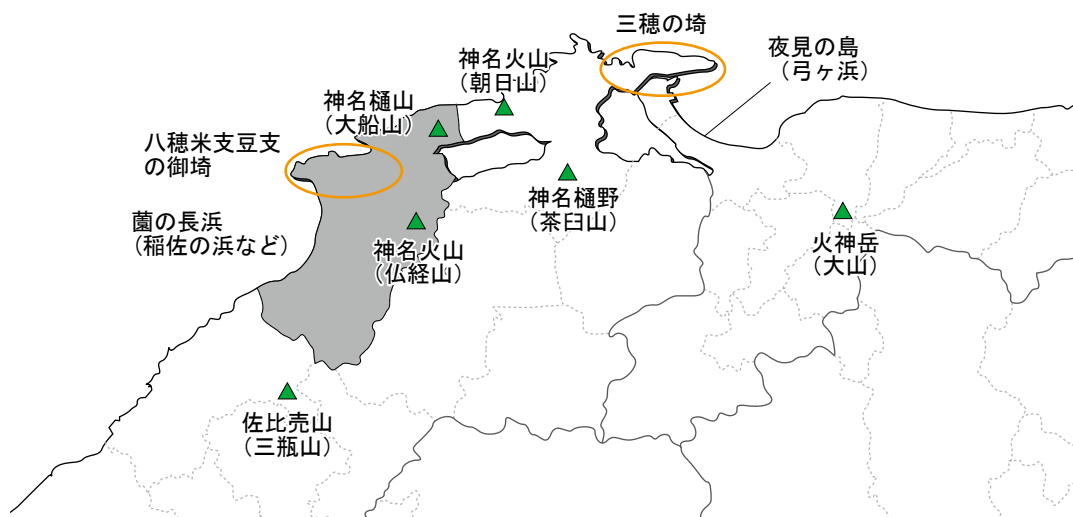


図3 『出雲国風土記』の代表的なゆかりの地

- ※1 **タービダイト層** 層になったシマ状の地層。小伊津町のは砂岩層（灰色）と泥岩層（黒色）が交互に積み重なった砂泥互層で、日本海拡大期に海底で形成されたもの。道路の近くに大規模に露頭しているため景観的にも迫力があり、他にはあまり例を見ない典型的なものであることから、地学学習や地域学習の教材的価値も高い。
- ※2 **経島** 柱状節理の様子が、経巻（経文を書いた巻物）を積み重ねたように見えることから、この名前がつけられた。ウミネコの繁殖地として有名で、国の天然記念物に指定されている。
- ※3 **かなびやま** 「かなび」とは「神の隠れこまれる」という意味で、「かなびやま」は信仰の対象として古代人に祭られていた山を指す。『出雲国風土記』では「神名樋野」、「神名火山」、「神名樋山」と表記され、意宇郡、秋鹿郡、楯縫郡、出雲郡の4カ所にあったとされる。これらはいずれも「入海（宍道湖）」を取り巻くようにそびえる。

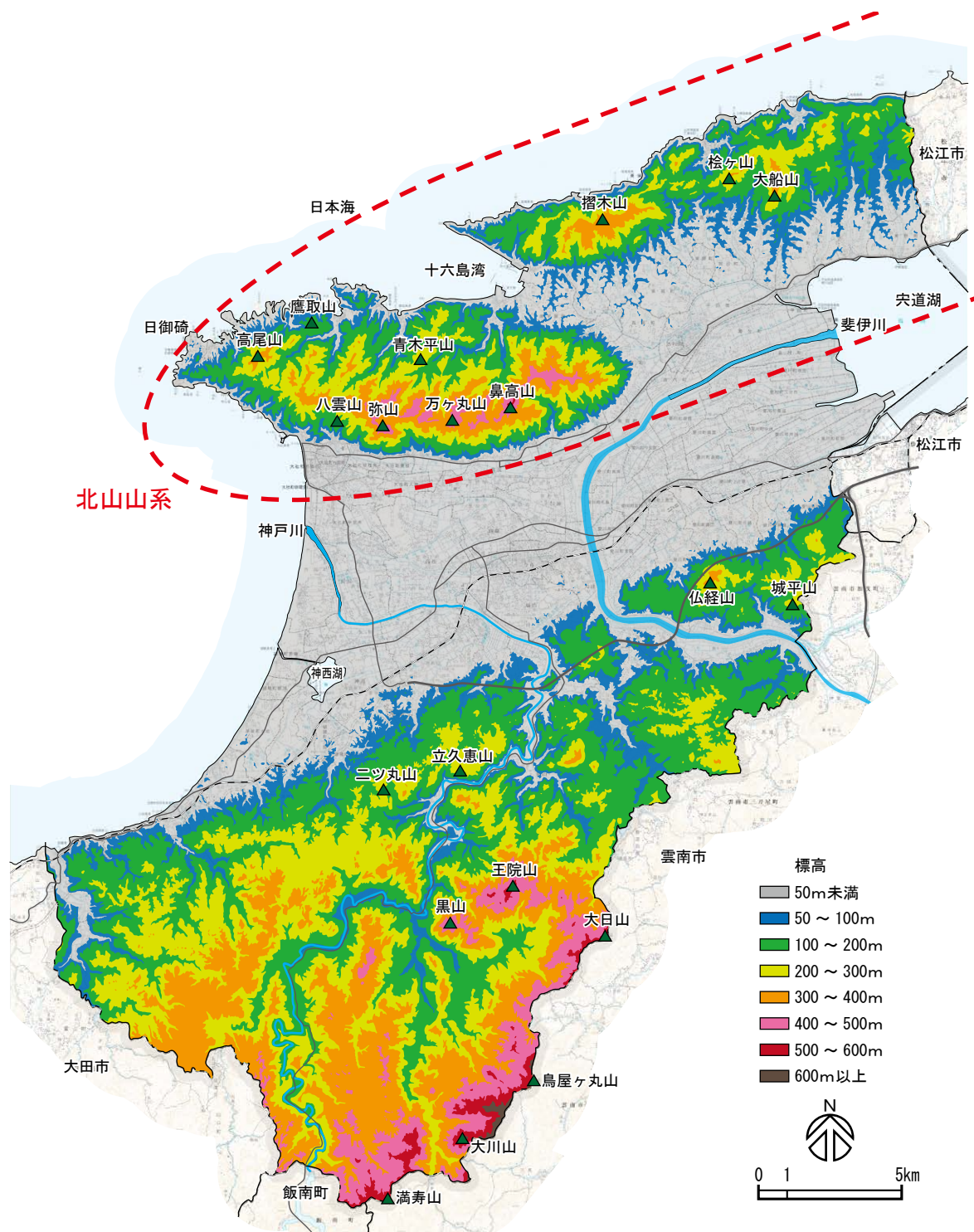


図4 出雲市の地形

(3) 動植物

出雲市の北部に位置する島根半島一帯や、南部の山地などには、二次林を中心に様々な植生が存在し、植生と相まって多様な動物の生息地となっています。一方で、シカやイノシシ等の被害も顕在化しています。

植生としては、アカマツやコナラの二次林が主体であり、寺社林などに一部にスダジイなどの自然植生がみられます。また、スギやヒノキの植林地も多く、大社海岸や長浜海岸、浜山などには、先人が植栽したクロマツ林も残っています。

水辺の自然環境としては、斐伊川、神戸川を骨格として、^{しんないとうがわ}新内藤川、^{ひら たふながわ}平田船川、^{あかがわ}赤川、^{じっけんがわ}十間川等の中小河川が流れ、東には宍道湖、西には^{じんざいこ}神西湖を擁し、貴重な動植物などが生息・生育する水辺の環境を備えています。特に宍道湖は^{なかうみ}中海とともに平成 17 年（2005）11 月に、湿地の保全と賢明な利用を進めることを目的としたラムサール条約登録湿地になっています。宍道湖西岸にあたる斐伊川河口一帯は、天然記念物のマガン、ヒシクイなどのガン類、コハクチョウなどの集団越冬地であり、西日本最大の野鳥の宝庫として知られています。宍道湖西岸には、野鳥観察などを目的とした宍道湖グリーンパークもあります。

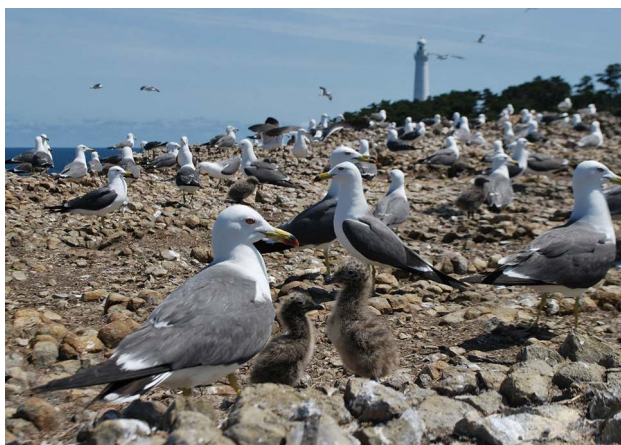
また、宍道湖には新種として発見されシンジコハゼと命名された小型の珍しいハゼが生息するほか、斐伊川の源流から中流部にかけては国指定特別天然記念物のオオサンショウウオが生息しています。加えて、宍道湖や神西湖、神戸川河口部にはヤマトシジミが生息しており、シジミ漁が盛んに行われています。

この他、島根半島北部の^{いのめ さぎうら}猪目や鷺浦、出雲市南部の神戸川、出雲市西部の^{たぎ}田儀や^{おだ}小田などには、自然度の高い清澄な河川に生息し河川の指標動物にもなっているカジカガエルが生息しています。中でも、島根半島に生息するカジカガエルは、標高の低い海岸の近くに生息していることで注目されています。

植物では、佐田町^{たんべ}反辺が島根県の固有種であるイズモコバイモの発見地として知られているほか、立久恵峡一帯は固有種のオオメノマンネングサのほか、オッタチカンギクやイワギリソウ、イブキジャコウソウなどが生育しており、植物の宝庫として知られています。

天然記念物では、経島ウミネコ繁殖地、日御碕の大ソテツが国の天然記念物に、立久恵は国の名勝・天然記念物に指定されています。そして、国指定特別天然記念物では、近年、トキの分散飼育・繁殖に市が取り組んでいるほか、田園地帯を中心にコウノトリの飛来が確認されています。また、日御碕の^{おうごんもうそうぐんらく}黄金孟宗群落は県の天然記念物に、立久恵峡特殊植物群落やコマチダケの^{そうせい}叢生（大社町）などは市の天然記念物となっています。自然公園では、宍道湖及び北山山系の^{いちばたやくし}一畑薬師や鰐淵寺一帯及び立久恵峡が、県立自然公園に指定されています。

さらに、県立出雲高等学校には、前身の島根県女子師範学校で博物学（特に植物学）を教えていた、^{ひらたごまたらう}平田駒太郎教諭が整備し、大正 8 年（1919）に「平田植物園」と命名された植物園（^{きゆうちやうえん}久徴園）が今も引き継がれており、全国に誇れる学校植物園となっています。



経島のウミネコ



飛来したコウノトリ

(4) 気候

出雲市の気候は、日本海側気候であり、冬は曇りや雨、雪の日が多くなっています。

平野部での積雪はそれほど多くはありませんが、北西の季節風が強く、その対策として築地松や防風林がつくられてきました。

年間平均気温は 14.6℃であり、月平均気温は 1 月が最低の 4.6℃、8 月が最高の 26.2℃です。また、8 月の最高気温の平均は 31.1℃となっています。

年間平均降水量は 1,685.2mmであり、7 月、6 月及び 9 月の降水量が相対的に多くなっています。また、月の日照時間は、冬期（12 月～2 月）には 100 時間を割り込み、一方で 5 月、8 月は 200 時間を超えています。

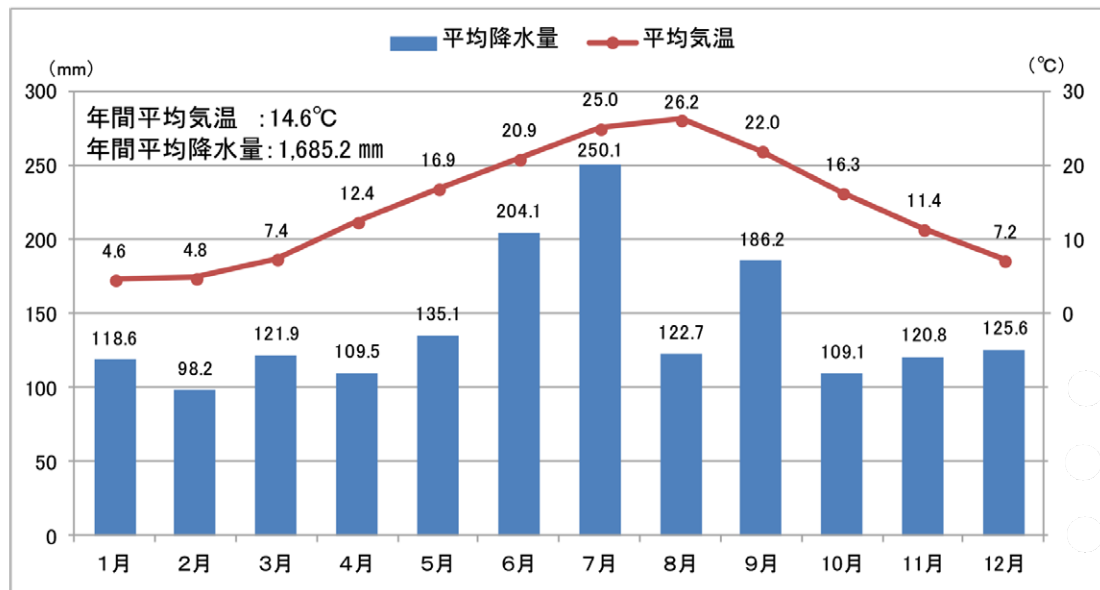


図5 出雲市の気候（平均：1981～2010年）

資料：気象庁

表1 出雲市の気候

要素	降水量 (mm)	平均気温 (℃)	日最高気温 (℃)	日最低気温 (℃)	平均風速 (m/s)	日照時間 (時間)
統計期間	1981～2010	1981～2010	1981～2010	1981～2010	1981～2010	1981～2010
資料年数	30	30	30	30	30	30
1月	118.6	4.6	8.1	1.0	2.7	55.7
2月	98.2	4.8	8.9	0.6	2.6	79.8
3月	121.9	7.4	12.2	2.3	2.5	134.3
4月	109.5	12.4	17.9	6.4	2.4	183.9
5月	135.1	16.9	22.2	11.3	2.2	206.0
6月	204.1	20.9	25.7	16.4	2.1	162.2
7月	250.1	25.0	29.1	21.3	2.1	177.4
8月	122.7	26.2	31.1	22.0	1.9	211.4
9月	186.2	22.0	26.8	17.8	1.9	150.8
10月	109.1	16.3	21.7	11.2	1.8	158.5
11月	120.8	11.4	16.2	6.6	2.0	107.7
12月	125.6	7.2	11.1	3.1	2.5	72.9
年	1,685.2	14.6	19.2	10.0	2.2	1,693.2

資料：気象庁

(5) 景観

出雲平野は、山陰地方随一の広さを有する穀倉地帯であり、そこには散居集落が広がっています。築地松と呼ばれる屋敷林を構える家もあり、北・西面を中心にクロマツを中心とした高木で囲まれています。この築地松が散在する景観は、出雲地方独特のものであり、10数mものクロマツが「陰手刈」という伝統的な職人技で美しく刈り込まれています。築地松に囲まれた屋敷は、春には水の張られた水田に浮かび、夏には緑の絨毯の中に、秋には黄金色の稲穂に包まれ、冬には北西の季節風が吹きすさぶ雪景色にたたずみ、四季を通じて様々に表情を変える景観を見せてくれます。こうした景観を全体的に眺望する地点として、出雲平野の両側に位置する北山山系及び中国山地にいくつかのビューポイントがあり、特に前者に位置する旅伏山^{たぶしさん}からは、眼下に広がる散居集落を見渡すことができます。また、数は少なくなりましたが、出雲地方独特の「反り棟」を有する茅葺き民家が残っています。

散居集落は、富山県の砺波平野^{となみ}や、宮城県の仙台平野、岩手県の胆沢平野^{いさわ}などにもあり、家の周りに屋敷林がありますが、形よく反りをつけて刈り込まれた築地松のような屋敷林はなく、築地松に囲まれた散居集落景観は、出雲平野にしか見られない大変珍しいものです。

出雲平野の北西側の大社地域には出雲大社があり、国宝の本殿や重要文化財の楼門をはじめとした建造物群と社叢^{しゃそう}などによって、幽玄な景観を形づくっています。その南には、神門通り^{しんもん}を中心に門前町が形成され、重要文化財の旧大社駅本屋^{ほんや}、登録有形文化財の出雲大社宇迦橋大鳥居^{うがばし}、一畑電鉄出雲大社前駅舎などが、歴史的な佇まいを印象づけています。門前町は出雲大社の東側にかつて千家・北島国造家^{じまこくそうけ}に仕えた神職らの屋敷が並んでいる社家通り^{しゃけ}があるほか、出雲大社の西側にも広がり、神迎^{むかえ}の道やお宮通りに伝統的な町家が建ち並ぶ景観が残っています。また、門前町の西側には稲佐の浜^{いなさ}が広がり、奉納山公園展望台からは、稲佐の浜を含め藺の長浜を俯瞰でき、遠くには『出雲国風土記』（国引き神話）で佐比売山と記されている三瓶山を望むことができます。

一方、出雲平野の北東側の平田地域には、江戸末期から明治初期にかけて木綿の集散地として栄えた名残を今に伝える「木綿街道」があり、宍道湖につながる平田船川周辺には、造り酒屋や醤油醸造元などの商家、町家の建物が残っており、路地的な空間と合わせて下町情緒を感じる町並みを残しています。

出雲平野の北に横たわる島根半島は、リアス式海岸の特徴的な風景が見られるとともに、変化に富む地形と相まって、入り江の浦には漁村や港町などの集落が独特の景観を形づくっています。また、冬には十六島のり^{うつぶるい}（標準和名：ウップルイノリ）の摘み取りが行われるなど、伝統的な生業・生活文化、風物詩としての景観も息づいています。

出雲平野の東側の宍道湖、西側の神西湖では、シジミ漁などが行われ、その文化的な景観が風物詩となっています。また、宍道湖西岸及び斐伊川河口一帯は、生息する動植物とともに特徴的な自然景観を形づくっています。一方、神西湖は景勝地としても知られ、江戸時代後期には「神西湖九景」が京都の絵師によって描かれました。

島根半島の西端部周辺には、朱色が映える重要文化財の日御碕神社や、登録文化財の出雲日御碕灯台、ウミネコの繁殖地として国の天然記念物に指定されている経島などがあります。これらは大山隠岐国立公園に指定されている日本有数の景観の一つです。

その山地部にある国の史跡鰐淵寺境内の一帯、神戸川中流域の国の名勝・天然記念物である立久恵の一帯は、優れた自然環境を有する景勝地であり、県立自然公園に指定されています。

出雲市西部の日本海沿岸は、島根半島とは対照的な砂浜が続きます。日本海から吹き付ける強い季節風と飛砂防止のために植林された松が連なり、白砂青松の海辺の景観を見ることができます。

この他、出雲市南部の山間地では、広範囲に多くの棚田が営まれており、平野の水田とは趣を異にする独特の風景が広がっています。

さらに、^{さだ}佐田地域など神戸川の中流域や斐伊川流域に広がる田畑、集落などの文化的景観と河川と山々が織りなす自然景観は、人々のくらしや地域の歴史文化を伝えています。

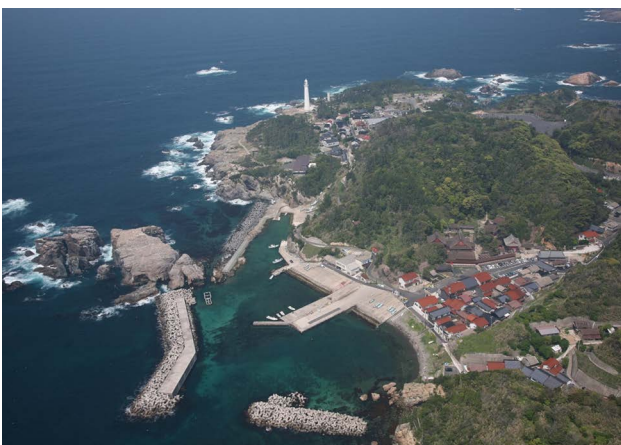
近年の新たな要素として、平成29年度に日本遺産に認定された「日が沈む聖地出雲」に関連した景観は、稲佐の浜や日御碕を中心とした構成文化財により、夕日にまつわるストーリーを体感できる美しさです。



稲佐の浜



立久恵峡



日御碕



菰の長浜と三瓶山

3. 社会的状況

(1) 人口動態

出雲市の人口の推移を国勢調査等からみると、平成12年(2000)から平成27年(2015)では約2,000人の減少となっています。特に、出雲地域、斐川地域を除く地域では減少傾向が続いています。また、将来推計人口は、令和2年(2020)から令和42年(2060)で約26,000人の減となっています。

世帯数については、市全体及び出雲地域、斐川地域では増加傾向にありますが、他の地域では減少又は停滞傾向にあります。世帯人数については、市全体及び各地域とも減少傾向が続いており、市全体で1世帯当たり3人を割り込んでいます。

島根県についてみると、人口と世帯人数は減少傾向、世帯数は増加傾向にあります。

表2 出雲市及び各地域の人口・世帯の推移

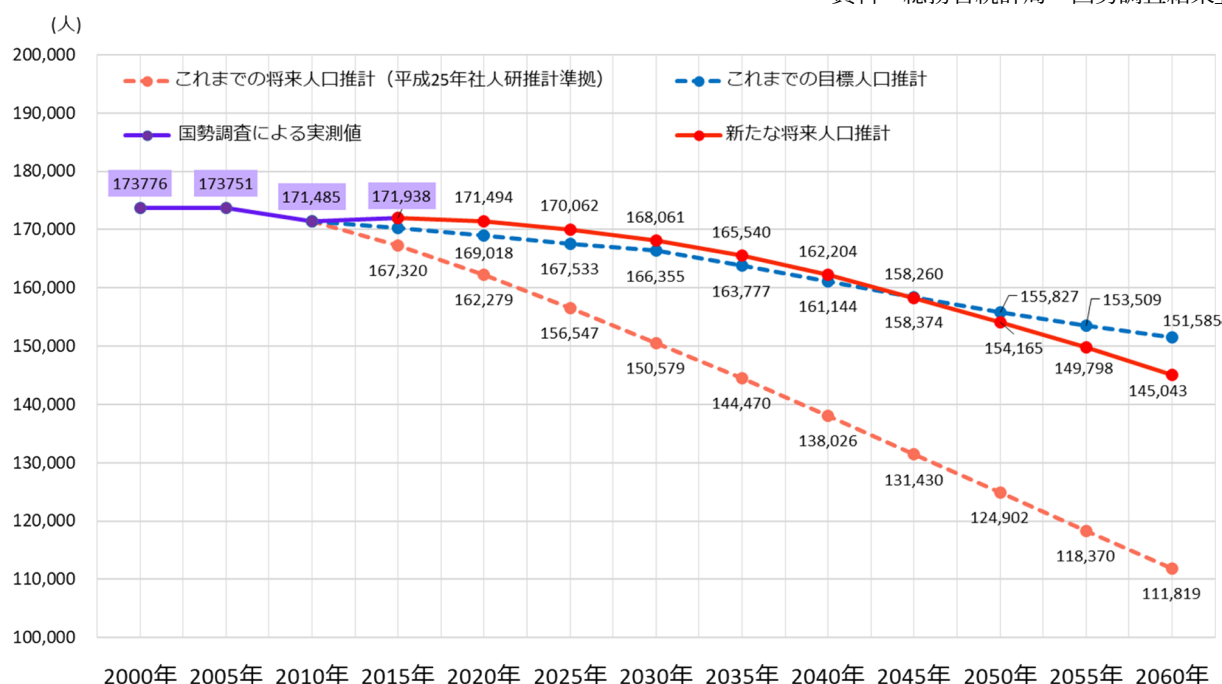
表2 出雲市及び各地域の人口・世帯の推移

(人・世帯)

地域名		H12 (2000) ※合併前			H17 (2005)			H22 (2010)			H27 (2015)		
		人口	世帯	世帯人数	人口	世帯	世帯人数	人口	世帯	世帯人数	人口	世帯	世帯人数
出雲市		173,776	52,548	3.31	173,751	54,828	3.17	171,485	55,952	3.06	171,938	60,130	2.86
内訳	出雲	87,330	28,626	3.05	88,805	30,200	2.94	89,020	30,973	2.87	92,074	34,638	2.66
	平田	29,006	7,798	3.72	28,071	7,909	3.55	26,908	7,858	3.42	25,294	7,794	3.25
	佐田	4,576	1,231	3.72	4,213	1,169	3.60	3,816	1,146	3.33	3,406	1,075	3.17
	多伎	4,215	1,276	3.30	3,095	1,276	3.06	3,767	1,253	3.01	3,543	1,232	2.88
	湖陵	5,813	1,709	3.40	5,732	1,758	3.26	5,369	1,727	3.11	5,270	1,748	3.01
	大社	16,020	4,829	3.32	15,581	4,799	3.25	14,916	4,767	3.13	14,342	4,795	2.99
	斐川	26,816	7,079	3.79	27,444	7,717	3.56	27,689	8,228	3.37	28,009	8,848	3.17
島根県		761,503	256,508	2.97	742,223	260,864	2.85	717,397	262,219	2.74	694,352	265,008	2.62

(人・世帯)

資料：総務省統計局「国勢調査結果」



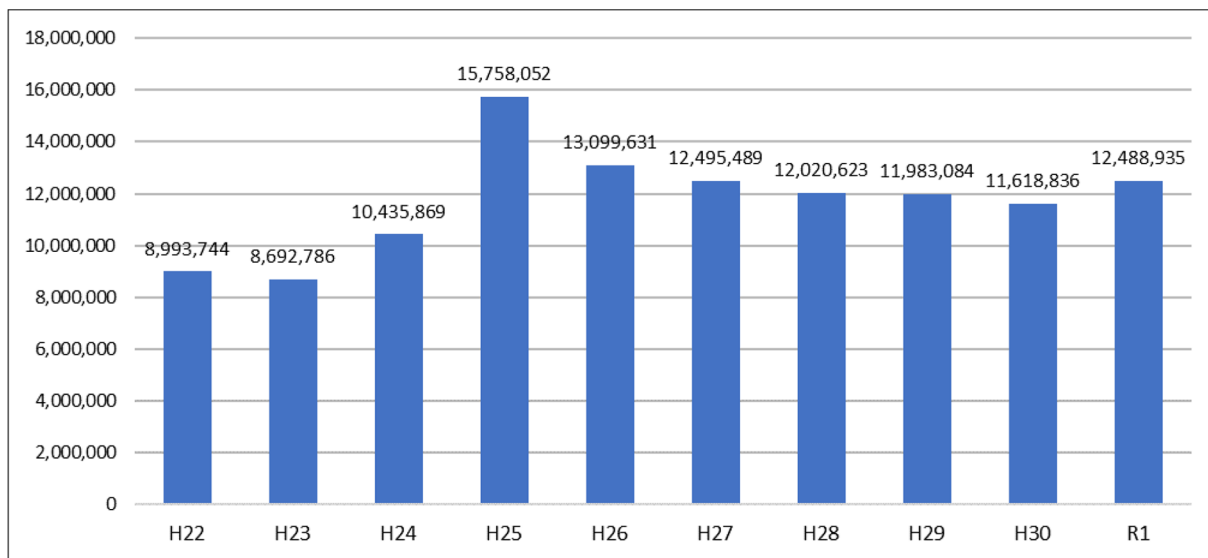
資料：出雲市まち・ひと・しごと創生第2期総合戦略（令和2年3月策定）

図6 将来人口推計による出雲市の総人口の推移

(2) 入込観光客数

出雲市の入込観光客数は、平成25年（2013）の出雲大社「平成の大遷宮」の効果もあり、1,600万人近くまで増加しました。その後減少に転じましたが、令和元年には1,200万人台まで回復しました。

また、令和元年の観光地点別入込観光客数をみると、出雲大社が約5割を占め、これ以外では日御碕、島根ワイナリー、道の駅湯の川、道の駅キララ多伎、一畑薬師、立久恵峡が上位となっています。



資料：島根県観光動態調査

図7 出雲市の入込観光客数の推移

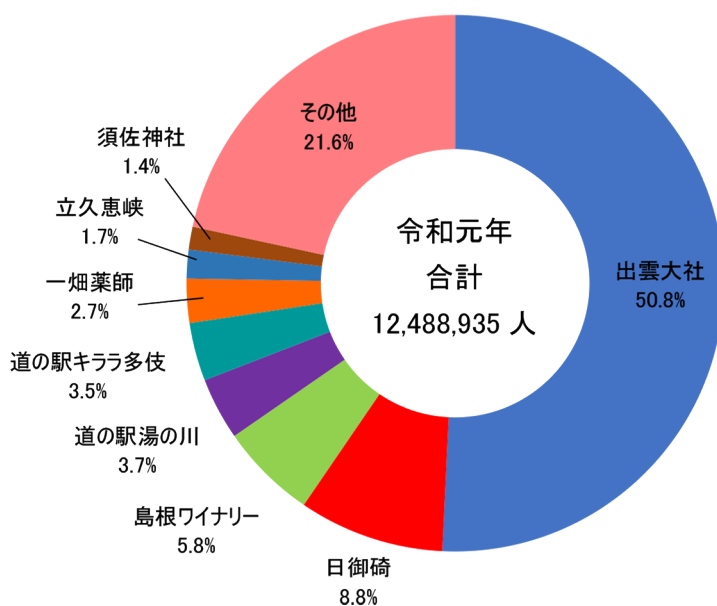


図8 出雲市の観光地点別入込客数（令和元年）

表3 文化財関連の主な観光地点別内訳

名 称	入込客	
	延べ数	割合
出雲大社	6,340,000	50.8%
日御碕	1,094,040	8.8%
立久恵峡	215,688	1.7%
古代出雲歴史博物館	214,044	1.7%
旧大社駅	83,821	0.7%
出雲文化伝承館	82,500	0.7%
荒神谷遺跡	35,025	0.3%
出雲弥生の森博物館	30,309	0.2%
平田本陣記念館	29,858	0.2%
鰐淵寺	8,965	0.1%

資料：島根県観光動態調査（令和元年）

4. 歴史的背景

(1) 歴史概要

【旧石器時代】

島根県内の旧石器時代の遺跡は少なく、以前は出雲市内では確認されていませんでした。このような状況の中、平成 21 年（2009）に多伎町内で砂原遺跡^{すなばら}学術調査団が発掘調査を行い、出土した石器が 11 万～12 万年前の「国内最古」のものとして報告されています。一方で、各学会や専門家の中には出土した石器について、その認定を巡り慎重な評価を強調する向きも見られます。今後は、学術的な論議を見守り遺跡の評価付けを進めていくこととなります。

【縄文時代】

縄文時代は出雲平野の大部分を古穴道湾が占めている期間が長く、人々が生活を営める場は山麓などに限られていました。そのため現在発見されている市内の縄文時代の遺跡はあまり多くありません。

出雲平野では古い段階である早期末の遺跡として、平野西部の砂丘上にある上長浜貝塚や北山山麓に位置する菱根遺跡^{ひしね}、山持遺跡^{ざんもち}などが挙げられます。続く前期末から中期までの遺跡は、斐川町の上ヶ谷遺跡^{だに}や神戸川左岸の三田谷Ⅲ遺跡^{さんただに}が確認されているだけです。後晩期は海退が進み三瓶山の噴火に伴う河川の沖積作用による平野形成が始まることから、平野中央部でも矢野遺跡^{くらしょうじにし}や蔵小路西遺跡^{うしろだに}が認められるようになるほか、山裾で三田谷Ⅰ遺跡、出雲大社境内遺跡、後谷遺跡^{うしろだに}が、神門水海の南で御領田遺跡^{りょうでん}、京田遺跡^{きょうでん}などが展開します。

これらの遺跡は、いずれも当時は水域が近くまで迫った場所に位置しており、漁労を行う上では適地であったと考えられます。

【弥生時代】

縄文時代には狩猟採集を主とした食糧調達が、弥生時代に入り稲作を中心に行われるようになると、広大な土地と水が豊富な出雲平野に多くのムラが営まれるようになります。そしてこれらのムラは、中期から後期にかけて一つにまとまりクニへと発展していきます。

ムラの出現 沖積地化による平野の形成が始まったばかりの縄文時代後期から弥生時代前期にかけては土地が安定しておらず、出雲平野にはあまり多くの人々は暮らせなかったようで、矢野遺跡のほかには目立った集落は認められません。平野に本格的に人が進出し多くのムラが出現するのは、人が住める環境が整った弥生時代中期になってからです。

ムラからクニへ 多くのムラが併存するようになった広大な出雲平野には、その生産力を背景に大きな勢力をもつ集団も出現したようです。その証として大量の青銅器が出土した荒神谷遺跡が挙げられます。ここで見つかった 358 本の銅剣は、発見当時に日本中で出土していた銅剣の総数を上回っており、弥生時代後期初頭のこの地に大きな勢力があったことを裏付けています。

そして弥生時代後期には、西谷墳墓群に大型の四隅突出型墳丘墓が次々と築かれます。

これらは墓の規模や豪華な副葬品からまさに「王墓」と呼べるものです。この時期に「出雲王」が出現し、出雲平野の多くのムラをクニとしてまとめたと考えられます。

他地域との交流 西谷墳墓群の 2 号墓や 3 号墓では、大陸からもたらされたガラス製品や水銀朱のほか、吉備や北陸、九州北部の特徴を持つ多量の土器が出土しています。また、猪目洞窟遺跡^{いのめどうくつ}では弥生

時代後期に埋葬された人骨の腕の部分に、南海で採れたゴホウラ製の貝輪がはめられていました。これらの例から、弥生時代は他地域との交流が活発に行われたことが分かります。

【古墳時代】

古墳時代は、現在の松江市から安来市にかけての出雲東部と、出雲市を中心とする出雲西部でそれぞれ大きな勢力が認められる時代です。

出雲東部では前期以降、前方後方墳や方墳を主とした古墳が継続的に築かれるのに対して、出雲西部では前期から中期までの古墳が少なく、後期になってからその数が一気に増え、墳形も前方後円墳や円墳を主とするという特徴があります。これら二つの勢力を象徴する後期の古墳が、前方後方墳のやましろふたごづか山代二子塚古墳（松江市）と前方後円墳のいまいちだいねんじ今市大念寺古墳（出雲市）です。墳丘規模もほぼ同じであることから、これらは拮抗した勢力で出雲を二分する東西両雄の墓と考えられています。

中期古墳の分布 出雲西部では前期の古墳はあまりなく単発的な出現にとどまりますが、中期になると数が少し増え、密に分布する地域が認められるようになります。この時期に、斐川町莊原では神庭岩船山古墳や軍原古墳などの、神西湖（神門水海）周辺では北光寺古墳や間谷東古墳などの分布が見られ、これらはいずれも陸運や水運という交通の要衝を押えた当時の勢力分布を反映していると思われます。

社会構造を示す古墳群 後期の上塩冶築山古墳の周辺では、この首長墓を取り巻く円墳群が発見されました。これまでは単独で築かれたと考えられていた上塩冶築山古墳が、実は小規模な円墳群に取り巻かれ、さらにその外側を上塩冶横穴墓群が取り囲んでいる様相が明らかになりました。首長墓を頂点にした円墳群と横穴墓群の配置構成で示される階級的序列は、当時の社会構造を如実に反映するものとして注目されます。

垣間見えた精神世界 未盗掘古墳である国富中村古墳の石室内では多数の出土品が見つかったほか、埋葬が終了してから何年か経過した後に石棺や副葬品が破壊されていることが分かりました。杯や甕などの土器には飲食物が入れていたと考えられることから、『古事記』に記された「ヨモツヘグイ」の思想を彷彿とさせる儀礼が行われていたと思われます。また、石棺や副葬品の破壊は被葬者のよみがえりを防ぐための再生阻止儀礼であることが明らかとなりました。これまでは後世の墓荒しの作業と考えられていた石室内の破壊の痕跡について、再考を迫る大きな発見となりました。当時の人々の精神世界や死生観が垣間見られる数少ない貴重な事例です。

【奈良・平安時代】

出雲には、奈良時代に編纂された『古事記』や『日本書紀』、『出雲国風土記』に記載されている伝承地や登場地が今でも数多くあり、当時の情景をうかがい知ることができます。

また、平安時代末期に編まれた歌謡集『梁塵秘抄』などの書物を紐解くと、出雲が全国的に知れ渡った聖地であったことがうかがえます。

風土記からたどる出雲市 『出雲国風土記』はほぼ完全な状態の写本が残る唯一の風土記であることから、他地域との比較において出雲の魅力を一層際立たせる貴重なものです。『出雲国風土記』には郷里編成や地名の由来などが詳細に記されており、現在の出雲市は「出雲郡」、「神門郡」、「楯縫郡」などとして登場します。これらの条文中に記述された山野や川などの自然の名称、地名、神社の多くは、今に受け継がれています。

また、古志本郷遺跡から見つかった大型建物跡は、神門郡家の郡庁院と推定されており、後谷遺跡で発見された礎石建物は出雲郡家の正倉と考えられているほか、天神遺跡や三田谷Ⅰ遺跡などからも官衙施設関連の遺構や遺物が発見されています。

さらに、近年の発掘調査で見つかった杉沢遺跡などの道路遺構は、『出雲国風土記』で「正西道」と記載される古代山陰道と考えられています。塩冶地区の古代山陰道推定ルート付近には「朝山郷新造院」に比定される神門寺境内廃寺や、火葬骨など仏教に関連する遺物が見つかった築山遺跡があります。これらの遺跡は、古代山陰道を経由して仏教をはじめとする様々な文化が伝わったことを物語っています。

広く知られていた出雲 平安時代の特筆すべき文化財としては、大寺薬師の仏像群、鰐淵寺の仏像や神像が挙げられます。大寺薬師には10世紀頃の薬師如来坐像のほか9世紀頃の中央の仏師の作と考えられる四天王立像があります。これら仏像群を納めていた大伽藍は慶安3年（1650）の大洪水と山崩れで壊滅したとされ、その後、住民たちによって救い出され今に守り伝えられた仏像群は、かつて重要な仏教施設がこの地に存在していたことを伝えています。

鰐淵寺に残る銅造観音菩薩立像は、持統6年（692）の制作とされ、金銅仏の貴重な基準作に位置づけられています。その台座には「出雲国」と刻されており、「出雲国」と記された最古の金石文として知られています。また、牛頭天王像や木造神像群は、平安時代の鰐淵寺における信仰形態や神仏習合のあり方を推定するうえでの貴重な彫刻群です。

10世紀の教養書にあたる『口遊』には「雲太・和ニ・京三」の記述がみられます。順に出雲大社本殿、東大寺大仏殿、平安京大極殿を示し、当時、出雲大社の本殿が巨大建造物として広く認知されていたことが分かります。さらに『梁塵秘抄』では日御碕や鰐淵が「聖の住所」として記載されており、この地が仏教者たちの有名な修行の場であったことが分かります。

このように、北山周辺は出雲大社、鰐淵寺、大寺薬師など信仰に関する文化遺産が集中する地域で、古くから全国的に知られていました。

【中世】

中世は、荘園・公領制が出雲にも浸透し新たな社会構成が成立する時代です。また、出雲大社（杵築大社）と鰐淵寺が強く結びついて隆盛を極めるとともに、武将の覇権争いと絡み合って中央の情勢がこの地にも持ち込まれ、大きな影響を与える動乱の時期でもあります。

海運の発展と市場の成立 鎌倉初期ごろまでには全ての地域や住民がいずれかの荘園や公領に属することとなりました。この中世社会の成立に伴い、各地から都に住む荘園領主のもとに年貢として大量の諸物資を輸送する必要が生じました。あわせて、生産力の増大に伴って日本海岸部での交易や、中海・宍道湖舟運の物資輸送も盛んになってきました。このため、古代律令制のもとでは輸送がもっぱら山陰道などの陸上交通によっていたものが、中世になると安価で合理的な海上交通へと移行しました。そして、この日本海における水運の成立を契機に、杵築、宇龍、平田、大津、田儀などが港（津）として発展します。水上交通を中心とするこうした交通網の整備・拡大が陸上交通とも緊密に結びつき、杵築、平田、塩冶、今市などでは市場が開かれるようになります。

出雲大社と鰐淵寺 中世は出雲平野の荒地が大々的に開拓される時期です。開拓がうまくいくとその土地の一部は出雲大社や鰐淵寺に寄進されることも多く、両者は領地を拡大しました。また、社会全

体が仏教的性格をおびた中世において、出雲大社と鰐淵寺は「神仏隔離に基づく習合」（寺院と神社が地理的・空間的・機能的に明確に区別されながらも両者が一体となることでより安定し、いっそう有効に機能するもの）によって車の両輪のように一体となり、出雲の信仰の中心的存在として機能しました。両者は明確に区別されながらも、出雲大社の主要な年中行事に鰐淵寺僧が参画するなど補完的に協力することで、国一宮としての機能を果たしました。このような事例は全国的に稀で注目されています。

また、インドの^{りょうじゆせん}霊鷲山が欠けて海に漂っていた浮浪山をスサノオが杵で突き固めたという中世の国引き神話は、出雲大社と鰐淵寺共有の縁起として成立したもので、「神仏隔離に基づく習合」の世界観を端的に表す興味深いものです。

盛隆を示す物証 出雲大社では平成12年（2000）の発掘調査でスギの大木を3本束ねて1本の柱とした巨大な柱が見つかりました。これは鎌倉時代の本殿のものと考えられ、古い絵図で示されていた通り、当時は巨大神殿であったことが明らかになりました。

一方、鰐淵寺境内では、近年の調査によって僧坊（僧の住まい）のあった可能性がある平坦面が90ヵ所確認されました。山間の狭い土地に堂宇と僧坊が建ち並び、多くの僧侶が行き来する往時の鰐淵寺の様子が浮かびあがってきました。

出雲の武将 中世出雲国衙在庁官人の筆頭を務めた朝山氏や、鎌倉期の出雲国守護として塩冶地域に守護所を構えた^{えんや}塩冶氏などが注目されますが、南北朝期の守護^{えんやたかさだ}塩冶高貞（?-1341）は後醍醐天皇（在位1318-39）や^{あしかがたかうじ}足利尊氏（1305-58）に従って多くの戦果をあげ、歴史の転換期に重要な役割を果たしました。高貞の活躍は、南北朝期の軍記物語『太平記』でも語られることとなります。

戦国時代の情勢 戦国時代に入ると出雲では^{あまご}尼子氏が勢力を拡大します。^{あまごつねひさ}尼子経久（1458-1541）は鰐淵寺の運営に介入したほか、出雲大社の境内に三重塔、鐘楼などの仏教施設を次々に建てて神仏習合の景観を創出しました。このようにして経久は、寺社の権限を掌握することでその勢力を抑圧しました。

この動向は次の毛利氏時代にも継続されたことから、寺領や社領が減らされた鰐淵寺や出雲大社はその勢力を次第に弱めていくこととなります。

なおこの時期、^{いわみ}石見との国境に位置する^{つるがじょう}鶴ヶ城・^{たかやぐらじょう}高櫓城や、軍事的にも重要な役割を果たした^{とびがすじょう}平田城・^{とびがすじょう}高瀬城・^{とびがすじょう}鳶ヶ巣城など多くの山城が築かれていきます。

【近世】

近世に入ると、出雲・隠岐両国に封じられた大名の堀尾氏が松江に築城して城下町を建設します。その後、城下町を中心として発展した松江市と比べて、出雲市域では広大な出雲平野での農業生産を中心に、村浦と舟運・交通の要地に発達した町場（在郷町）が連携して、発展していくことになります。また、国学や洋学などの学問が出雲では独自の展開を遂げ、特に和歌では全国的にも注目される地域となります。

出雲平野の農地開拓 中世末から近世初頭に斐伊川が完全に東流するようになると、松江藩の水利政策により、河口付近では「川違え」による宍道湖の農地開拓が進められました。こうして拡大した農地を基盤に繁栄した地主の中には後に豪農へと発展する者も認められます。

一方、斐伊川が宍道湖に注ぐ東流河道に固定されたことにより、出雲平野西側の新田開発が本格化することになりました。各地で進められた荒地の開拓において、地元の^{みきよへえ}三木与兵衛（1595-1643・遙堪

付近)、秦喜兵衛（生没年不詳・西園）、大梶七兵衛（1621-89）、井上恵助（1721-94・浜山）らが大きく貢献しました。

木綿栽培とたたら製鉄の盛行 出雲平野では18世紀に入ってから木綿栽培が盛んになります。そして、平田町、今市町、直江町、杵築町では木綿市が開かれるようになります。

農産物以外では、たたら製鉄による鉄生産が注目され、市内では田儀櫻井家や田部家によってたたら操業が盛んに行われました。特に田儀櫻井家たたら製鉄遺跡は、本宅跡や山内従事者の住居跡などが残る宮本鍛冶山内遺跡のほか、生産に関連する遺構が残る越堂たたら跡、聖谷たたら跡など、たたら操業に関連する一連の遺構群が良好に残っています。

また、製品を搬出した田儀港のまちなみも当時の面影を今に伝える貴重な文化的景観です。

産物移出の水運利用 産物などの運搬には水運が利用されました。出雲市域西部（かつての神門郡）および奥出雲方面で生産された米をはじめとする産物は、斐伊川・神戸川などの舟運を利用して海岸部まで運ばれました。斐伊川からは高瀬川によって杵築に隣接する荒木川方に集荷され、さらに船頭仲間によって宇龍へと輸送されました。海岸部の港からは、松江藩によって大坂や尾道へと送られるほか、舟宿を通じて各地の舟に売却されるなどして、国外へ移出されました。

出雲大社と鰐淵寺の神仏分離 出雲大社は寛文の遷宮を契機に境内から仏教施設や鰐淵寺僧を一掃し、400年余りに及ぶ鰐淵寺との関係に終止符を打ちました。全国に先駆けて行われたこの神仏分離は、宗教史においても重要な出来事として位置づけられています。

その後、出雲大社は「出雲御師」と呼ばれる神職たちが全国各地に布教に赴き、多くの信者を杵築に招き入れる活動を積極的に展開しました。杵築では参詣客を対象とした富くじも行われたことから、門前町は大きく発展しました。

学問の発展 松江の学問や文化が武士を中心として発展したのに対し、出雲では神職や町人が中心となって発展したという特徴があります。

出雲はスサノオが最初に歌を詠んだ地とされることから和歌発祥の地として知られています。戦国期には千家、北島両国造家でおのおの歌会が開かれていたようです。この潮流が江戸時代の和歌発展につながり、出雲歌壇は花開きます。江戸の僧で歌人の明珠庵釣月（1659-1729）は、宝永年間（1704-11）に来雲し、二条流和歌を広めたほか、「大社八景」の和歌を出雲大社に奉納しました。江戸後期に入ると、本居宣長（1730-1801）に学んだ出雲国造家の千家俊信（1764-1831）が出雲に宣長の国学をもたらししました。俊信は幕末の出雲（大社）歌壇に鈴野屋流を導入して和歌盛隆の基礎を築き、私塾「梅廼舎」は多くの門人を育てました。その後、明治の初めころまでは、千家尊孫（1796-1873）や富永芳久（1813-80）の活躍により出雲歌壇は全国的にも注目される存在となっていきます。

その他の学問と私塾 このほか、出雲の学問の発展に貢献した人として、鳴滝塾でシーボルトから西洋医学を学んだ西山砂保（1781-1839）、上塩冶村に有隣塾を開いた伊藤宜堂（1791-1874）、英語学校の包蒙館を開いた勝部其楽（1846-1933）らが挙げられます。

このように、城下からは離れている出雲市域にも、いくつもの個性のある私塾が存在しました。これらの私塾に富農富商層の子弟や神職、僧侶が相次いで入門し高い知識と教養を身につけ、幕末から近代にかけて地域の指導的役割を果たしていきました。

【近代】

近代の出雲市における主な事項としては、鉄道の開設、紡績織物工場の進出、学校の設立などが挙げられます。ことに鉄道は寺社への参拝の利便を図るために整備され、鉄道開設により出雲大社や一畑寺の参詣者は年々増え続けていくこととなります。

鉄道の開設 米子から随時西へ延びてきた山陰線は、明治43年（1910）に「出雲今市駅」まで開通します。その後、支線の大社線が開通した明治45年（1912）以降、杵築町は出雲大社への参拝客で賑わうこととなります。

また、当時、一畑講が盛んとなり一畑寺への参拝が増えてくると、平田を中心に東は松江から西は出雲大社に至る鉄道を要望する声が高まります。この路線は一畑軽便鉄道として、大正3年（1914）にまず今市—平田間が開通し、翌年今市—一畑間の全線が開通します。そして、出雲大社と宮島を結ぶという壮大な計画のもと昭和7年（1932）には大社宮島鉄道が出雲今市—出雲須佐間^{すさ}で開通します。しかし、この計画は頓挫し宮島までの路線は実現せず、名称も出雲鉄道に変更され、昭和40年（1965）にはついに廃線となりました。

一方で、鉄道の普及は明治20～30年代に盛んであった宍道湖における汽船定期航路が姿を消す要因にもなりました。

製糸紡績・製織工場の進出 明治26年（1893）に平田製糸合資会社の設立を端緒に、出雲市では製糸紡績・製織工場の進出が相次ぎました。明治32年（1899）ごろに平田両全（株）、大正9年（1920）に出雲製織（株）（後の大和紡績）、大正12年（1923）に郡是製糸（株）今市工場、大正14年（1925）に鐘淵紡績斐川工場が誕生し操業を始めます。これにより出雲市は山陰地方における一大工業地帯となりました。

学校の設立 明治5年（1872）に「学制」が發布されると平田の石橋孫八宅（石橋家住宅）に郷校が開設され、翌明治6年（1873）には旧郡屋^{ぐんや}（郡役人が執務した郡の役所）に平田一番小学が開校します。これが県内で最初の小学校の開校です。また、雨森精翁^{あめのもりせいおう}（1822-82）が明治11年（1878）に平田町に開いた漢学塾^{えきらくしゃ}赤楽舎は、公には中学校扱いとなっており地方の教育を補いました。

高畝栽培 米の増収を図るために、出雲平野では高畝栽培による米作りが行われました。この農法は収穫後の晩秋から初冬にかけて湿田に高畝を掘りあげ、ここに裏作の緑肥^{もくしゆく}として苜蓿と呼ばれるマメ科の植物を植えて栽培し、地中の窒素を造成することで米の生産性をあげるものです。出雲平野で特徴的にみられる農法ではありますが、大変な重労働を必要とするうえ、米の品質が良くないという問題も伴いました。

【現代】

出雲の歴史をたどるうえで現代は画期的な変化が多く認められる時代です。ここでは、出雲路のモータリゼーション化、平成の市町村合併、斐伊川放水路事業を取り上げます。

出雲路のモータリゼーション化 明治45年（1912）に国鉄大社線が開通して以来、大社駅の乗降客は年々増え続け、昭和26年（1951）にはピークを迎えます。しかし、昭和37年（1962）に市街地北部に新設の国道9号が開通して、昭和40年代に自動車が大幅に普及すると急速に出雲路のモータリゼーション化が進みました。その結果、公共交通機関である大社線は利用者が年々減少し、平成2年（1990）にはついに廃線となりました。その後、20年あまりにわたり出雲大社の門前町は徐々に

衰退していきましたが、平成 21 年（2009）に山陰自動車道が出雲 I C まで開通すると、平成の大遷宮をきっかけに多くの参拝者が出雲大社を訪れ、門前町はかつてのにぎわいを取り戻しました。

平成の大合併 出雲市、平田市、佐田町、多伎町、湖陵町、大社町の 2 市 4 町は平成 17 年（2005）に合併し、平成 23 年（2011）には斐川町も加わり新たな出雲市が誕生しました。

この大合併は出雲平野を中心としたまさに「平成の国引き」ともいえ、出雲市は県央の中核都市としてますます大きな発展が期待されるまちとなりました。

再びつながる斐伊川と神戸川 斐伊川放水路（総延長 13.1km）はこれまで地域の人々を悩まし続けた洪水を防ぐために開削されました。明治初めの構想に端を発し、昭和 56 年（1981）に事業着手、平成 25 年（2013）6 月に完成したこの放水路事業は、まさに 100 年の大計で「平成のオロチ退治」と称されています。この放水路は、斐伊川が完全に東流し神戸川とのつながりが断たれた江戸時代以来、両河川を再び結び付けるとともに、2000 年に及ぶ出雲平野の治水の歴史を私たちに伝えています。

■出雲市に関わる主要な事項（歴史）

区分	西暦	年号	出雲市関係	日本
縄文		後期	斐伊川と神戸川の沖積作用で出雲平野の骨格ができあがる	
弥生		前期	最初のムラが出現する（原山遺跡・矢野遺跡）	
		中期	ムラが増え大規模集落が出現する（四絡遺跡群など）	
		後期	四隅突出型墳丘墓が築造される（青木遺跡）	
			青銅器の祭祀が行われる（荒神谷遺跡）	
			環濠集落が規模を拡大する（古志遺跡群）	
			「クニ」的なまとまりが明確になる	
			「王」が大型の四隅突出型墳丘墓に葬られる（西谷墳墓群）	
			出雲と吉備の首長が交流する（西谷 3 号墓など）	
		終末	出雲最大の四隅突出型墳丘墓の築造（西谷 9 号墓）	卑弥呼が魏に遣使
古墳	239	前期	大寺 1 号墳などが築造される	
		中期	北光寺古墳・神庭岩船山古墳などが築造される	
		後期	出雲西部の首長墓、今市大念寺古墳・上塩冶築山古墳・上塩冶地藏山古墳が築造される	
飛鳥	645	大化 1		大化の改新
	659	（斉明） 5	出雲国造に命じて神の宮（杵築大社か）をつくらせる	
	692	（持統） 6	鰐淵寺所蔵の銅造観音菩薩立像がつくられる	
	694	8		藤原京に遷都
	701	大宝 1		大宝律令制定
奈良	710	和銅 3	忌部子首が出雲国司として赴任	平城京に遷都
	716	霊亀 2	出雲国造果安、神賀詞を奏上（国史における神賀詞奏上の初見）	
	733	天平 5	『出雲国風土記』が撰上される	
	794	延暦 13		平安京に遷都
	795	14	出雲国造人長、遷都により神賀詞を奏上	
	813	弘仁 4	出雲国で俘囚の反乱が起こる	
	814	5	渤海国使王孝廉ら出雲国に来着。俘囚の反乱と渤海使への供給のため出雲国の田租が免除	

区分	西暦	年号	出雲市関係	日本
平安	833	天長 10	出雲国造豊持、神賀詞を奏上（国史における神賀詞奏上の最後）	
	867	貞観 9	出雲・石見・隠岐など5国に四天王像が下賜され、新羅の賊心調伏、災変消却のための転読、修法などが命じられる	
	880	元慶 4	出雲地震	
	1032	長元 5	出雲国司橘俊孝、神託と偽って杵築大社を造営しようとして佐渡国に配流	
	1067	治暦 3	杵築大社、国衙から内遙堪を寄進される。出雲国における中世的郷の初見	
	1102	康和 4	このころ、他国では神々が出雲に集まることから、10月を「神無月」と呼ぶようになったという	
	1179	治承 3	このころ鰐淵・日御碕が摂津箕面・播磨書写山などとならぶ聖の住所として知られる	
鎌倉	1185	文治 1		鎌倉幕府成立
	1186	2	源頼朝の下文によって出雲孝房を杵築大社神主職に補任。頼朝、出雲則房にかえて内蔵資忠を杵築大社総検校職に補任する	
	1248	宝治 2	杵築大社正殿遷宮	
	1254	6	守護佐々木泰清、鰐淵寺は国中第一の伽藍だとする	
	1271	文永 8	杵築大社三月会相撲・舞頭役結番帳が作成される	
	1300	正安 2	幕府、出雲国守護佐々木貞清と国衙在庁朝山時綱・多禰頼茂の3人を杵築大社造営奉行に任命	
	1332	正慶 1 (元弘 2)	後醍醐天皇、隠岐配流。隠岐行在所において鰐淵寺根本堂を造営すると願文を立てる	
	1333	正慶 2 (元弘 3)	塩冶高貞ら船上山に赴き後醍醐天皇に味方する。後醍醐天皇、王道再興の願文を杵築大社におさめ、宝剣のかわりに神宝の剣をだすよう杵築神主に命じる	
	1336	建武 3 (延元 1)		
	1341	暦応 4 (興国 2)	足利直義、鰐淵寺北谷衆徒らに対し、佐々木高貞の誅伐を命じる	
室町	1344	康永 3 5	千家孝宗と北島貞孝、大社神主・国造職・所領と神事などについて和与する。杵築大社、千家・北島両国造家に分かれる	室町幕府成立
	1355	文和 4 (正平 10)	鰐淵寺の大衆、48カ条におよぶ山内の式目を定め、連署起請する	
	1366	貞治 5 (正平 21)	倭寇鎮圧のため高麗王朝から派遣された金竜ら17人の使者、出雲に着岸。京都にむかう	
	1392	明德 3		
	1396	応永 3	出雲守護京極高詮、杵築大社三月会の法度を定める	
	1467	応仁 1		
	1508	永正 5	尼子経久、京極政経から事実上の守護権を継承	
	1509	6	尼子経久、鰐淵寺に対し3カ条の掟を定める	
	1552	天文 21	尼子晴久、杵築大社に対し20カ条からなる掟を定める	
	1562	永禄 5 6	毛利軍、出雲今市に着陣し、出雲制圧にのりだす 宇龍に北国船や唐船が着岸する	
	1566	9	尼子義久、富田城を開城し毛利氏に下る	
	1570	元亀 1	毛利氏、鰐淵寺の掟を定め、杵築大社において年3回の護摩供を行うことなどを命じる	

区分	西暦	年号	出雲市関係	日本
安土 桃山	1573	天正 1		室町幕府滅亡
	1576	4	杵築大社造営のため、出雲一国徳政令だされる	
	1583	11	九州名護屋にむかった丹後国田辺の城主細川幽斎、宍道湖を経て杵築大社に参詣する	
江戸	1588	16	毛利氏の奉行人、惣国の刀狩を命ぜられたが、日御碕社については一部が免除されたと伝える	関ヶ原の戦い
	1591	19	京都において出雲法楽の連歌が行われる 毛利氏、出雲国惣国検地にもとづき、千家・北島両国造家などに知行を打ち渡す 秀吉の朝鮮出兵計画により杵築大社領のうち 1000 石が没収され、かわりに徳政が認められる	
	1597	慶長 2	吉川広家、秀吉から分配された明の賜物を杵築大社に寄進する	
	1600	5	堀尾忠氏、遠州浜松より出雲・隠岐両国 24 万石に封ぜられ富田城に入る	
	1603	8	出雲阿国、京都で「かぶき踊り」始め大評判となる	
	1608	13	松江藩堀尾氏、三木源四郎に菱根新田の開墾を命じる	
	1609	14	杵築大社仮殿遷宮	
	1616	元和 2	三木与兵衛、菱根池跡地排水のため河川開削に着手する	
	1633	寛永 10	大規模な洪水が発生し、斐伊川土手が武志村付近で決壊する	
	1634	11	京極忠高、出雲・隠岐 26 万石に移封され松江藩主となる	
	1638	15	松平直政、信濃国松本を転じて出雲国 18 万 6000 石に封じられ、隠岐国 1 万 8000 石を預けられる	
	1658	万治 1	神門郡・楯縫郡・出雲郡の郡域が再編される	
	1667	寛文 7	杵築大社正殿式遷宮	
	1674	延宝 2	大規模な洪水が発生し、広域に被害が生じる	
	1678	6	荒木浜開拓のために湊原新町が建設され、馬庭佐平太と大梶七兵衛が開発棟梁人を務める	
	1686	貞享 3	差海川が開削される	
	1687	4	斐伊川の川違え普請が実施される。神門郡で高瀬川が開削される	
	1689	元禄 2	十間川が開削される	
	1702	15	大規模な洪水が発生し、斐伊川の武志堤が決壊する	
	1717	享保 2	このころ、外国船、十六島浦にたびたび来航	享保の大飢饉
	1720	5	荒木川方役所が設置される	
	1723	8	斐伊川の川違え普請が実施される	
	1725	10	松江藩鉄方御法式を定め、鉦場所を 4 郡 10 カ所に定める	
	1732	17	雲隠石 3 国とも蝗害による大飢饉。神門郡で百姓一揆 大森代官井戸平左衛門、甘藷栽培をすすめる	
	1744	延享 1	杵築大社正殿遷宮	
	1747	4	松平宗衍（6代藩主）の親裁による延享の改革がはじまる	
	1767	明和 4	松平治郷（7代藩主）のもと御立派改革がはじまる	
	1770	7	神門郡・楯縫郡で斐伊川の檀土手普請が始まる。この年までに平田・直江・今市に木綿市が成立する	
	1778	安永 7	井上恵助、浜山の植林を完成	
	1782	天明 2	大規模な洪水が発生する（83、84 年も発生）	天明の飢饉 (1782 ~ 1787)

区分	西暦	年号	出雲市関係	日本
江戸	1783	天明 3	飯石郡・神門郡で大規模な百姓一揆が発生する	
	1785	5	斐伊川の川違え普請が実施される	
	1806	文化 3	伊能忠敬、石見から出雲の海岸測量	
	1816	13	神門郡神西村・高岡村で百姓一揆	
	1831	天保 2	新川の開削が始まる（1939年 廃川となる）	
	1832	3	斐伊川に新川が開通	
	1854	安政 1	安政南海沖地震 出雲大社付近 150 棟倒壊	
	1868	明治 1		
	1871	4		
	1872	5	平田の石橋孫八宅に郷校が開設	
明治	1873	6	旧郡屋に平田一番小学校創設。県下の小学第一号	明治維新 (江戸幕府滅亡) 廃藩置県 「学制」の発布
	1878	11	雨森精翁、私立学舎亦楽舎開校（81年廃校）	
	1881	14	島根県が現在の県域となる	
	1889	22	製糸会社の平田両全株式会社設立 合併により新たな町村が成立する	
	1890	23	ラフカディオ＝ハーン（小泉八雲）、英語教師として松江にくる	
	1894	27		
	1896	29	出雲・楯縫・神門郡を合わせて簸川郡となる（今市町に郡役所をおく）	
	1903	36	日御碕灯台竣工	
	1904	37		
	1912	大正 1	山陰線、出雲今市・京都間全通	
大正	1914	3	一畑軽便鉄道の出雲今市・雲州平田間開通	日清戦争（～95） 郡制施行 (1923年廃止) 日露戦争（～05）
	1920	9	出雲製織株式会社設立	
	1923	12	郡是製糸今市工場操業開始	
	1924	13	旧大社駅舎改築。現在の姿となる	
	1925	14	鐘淵紡績簸川工場操業開始	
	1930	昭和 5	一畑電鉄（1925年社名変更）、川跡・大社神門間開通	
	1937	12		
	1941	16	出雲市制施行	
	1945	20	新川廃川地に海軍航空基地（大社基地・直江基地）が建設される。米軍機の空襲により死傷者が発生する	
	1965	40	一畑電鉄、立久恵線廃止	
昭和	1966	41	出雲空港開港	関東大震災 普通選挙法公布 日中戦争開始 真珠湾攻撃 戦争終結
	1975	50	島根医科大学開学	
	1984	59	荒神谷遺跡から銅剣 358 本発見。翌年、銅鐸 6 個と銅矛 16 本発見	
	1990	平成 2	大社線廃止	
	1994	6	斐伊川放水路事業起工（2013年工事完了）	
	1995	7	島根県立看護短期大学開学	
	2005	17	出雲市・平田市・簸川郡大社町・湖陵町・多伎町・佐田町の2市4町が合併。新・出雲市となる（合併方式：新設）	
	2011	23	斐川町と合併（合併方式：編入）	

(2) 沿革

出雲市の沿革について、昭和 16 年（市制施行の年）以降の行政区画の変遷を沿革図により整理します。近代以降の市町村合併には、おもに①明治 22 年（1889）の町村制施行に伴う「明治の大合併」、②昭和 28 年（1953）の町村合併促進法施行前後の「昭和の大合併」、③平成 17 年（2005）の新合併特例法施行前後の「平成の大合併」の三つの画期がありました。これに編入を加えて、平成 23 年（2011）に現在の出雲市の行政区画となりました。

現在の基礎的なコミュニティ単位（43 のコミュニティセンターの配置）は、①「明治の大合併」で成立した村の単位とおおむね一致します。ただし、佐田地域の須佐には西須佐村・東須佐村、窪田には窪田村・山口村、多伎地域には久村・田岐村・田儀村、湖陵地域には西浜村・江南村が存在しました。

なお、第 3 章「1. これまでの文化財調査の概要」では、「市内文化財の地域別聞き取り調査」の概要をまとめていますが、その基礎的な単位は、コミュニティセンターのある 43 の地区としています。

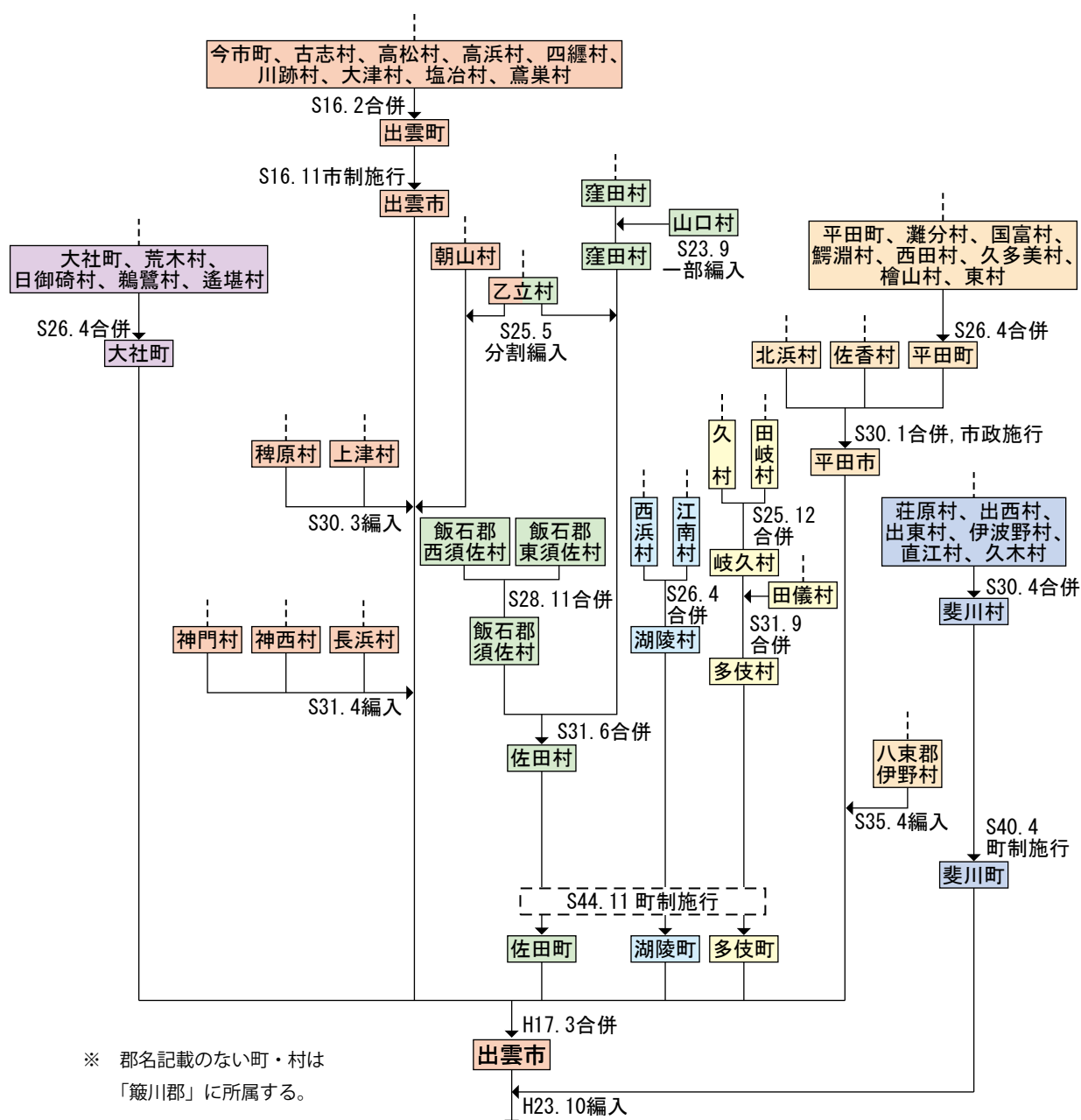


図 9 出雲市の沿革

※（ ）内は明治期の町村合併以降に存在した村名

